

2026 年度 修士課程入試問題

[一般・共通]

出題の意図

本設問は、心理学領域の代表的な論文を題材として、感覚記憶に関する基本概念の理解度を評価することを目的とする。あわせて、結果から理論的な含意を導く思考力を測る。

模範解答例

(1) 全体報告法では、短時間提示された文字列（例：3行×4列＝12文字）のすべての記銘項目を参加者が覚えて報告するよう求められる。**[4点]**

部分報告法では、刺激提示の直後または遅れて提示される音の高さ（例：高音・中音・低音）を合図（手がかり）として、それに対応する1行のみを報告するよう指示される。**[4点]**

(2) 部分報告法では、報告が求められるのは1行のみである。しかし、刺激提示時点で参加者はどの行を報告するかを知らないため、すべての行を等しく保持しようとする。**[3点]**

報告するまでにアイコニックメモリが完全に消失していなければ、その行に関しては高い精度での再生が可能となる。**[3点]**

部分報告法の成績（例：1行あたり3文字）を全体（例：3行）に換算することで、瞬間的（短期的）にはすべて（9項目）が知覚・保持されていたという推定が可能となる。**[3点]**

(3) 部分報告法による知見は、視覚刺激が提示された直後には、かなり豊富な情報が一時的に保持されうるという感覚記憶の特徴を示している。**[2点]**

この記憶は、高精度であるが、数百ミリ秒程度で急速に消失する。**[2点]**

また、注意の向けられた部分だけがその後の処理（例：ワーキングメモリへの転送）に残ると示唆される。**[2点]**

この知見は、知覚の有無と記憶の成績が同じではないことを示している。すなわち、一時的に保持される情報と実際に報告できる情報との乖離を示した点で画期的であった。**[2点]**

* 下線部は解答に際して重要な箇所である。ただし、部分点あり。

* 括弧内は例であるため、記載が無くてもよい。

* 誤字脱字がいくつあっても、小問のなかで最大マイナス1点とする。

2026 年度 修士課程入試問題

[一般・共通]

問題 以下の2問について解答しなさい。文頭に問題番号を明記すること。(各25点)

1. Sperling (1960) は、視覚的な感覚記憶 (アイコニックメモリ) の容量を測定するために「部分報告法 (partial report)」を用いた。下図を参照して、以下の問いに答えなさい。

T	D	P	X
S	R	N	J
F	Z	M	V

(1) Sperling の実験において、「全体報告法」と「部分報告法」の手続きの違いを簡潔に説明しなさい。

(2) 「部分報告法」によって、なぜアイコニックメモリの容量のより正確な推定が可能となるのか、詳しく説明しなさい。

(3) 「部分報告法」の知見は視覚情報処理のどのような性質を示唆しているか、自らの考察を含めて説明しなさい。

解答例

[2] (16点)

類型論

理論 (2点)

クレッチマーの類型論：体格と気質

ユングのタイプ論：外向型と内向型 8タイプに分類 他

長所 (3点)：複雑な性格を統一されたルールの下で全体的に理解が可能

短所 (3点)：中間型や混合型は無視される。同じ類型の人を画一化して理解してしまう(ラベリング)。性格を固定化してしまう。

特性論

理論 (2点)

アイゼンク性格理論：「内向・外向」と「神経症傾向」の2次元からなる。例. モーズレイ人各目録

キャッテル性格理論：「共通特性」と「独自特性」に分類。例. 16PF

ビクファイブ性格理論：「神経症傾向」「外向性」「開放性」「調和性」「誠実性」 他

長所 (3点)

特性ごとに数量化が可能、個人間の客観的な比較が可能

短所 (3点)

断片的に捉えるため、性格の全体像がつかみづらい。

[3] (9点)

問題点 (3点)

- ・10項目それぞれにt検定を行っている点

理由 (3点)

- ・第一種の過誤(本当は差がないのに差があると結論づけてしまう)のリスクが高くなってしまう。

改善点 (3点)

- ・(逆転項目を考慮した上で)項目の加算得点または平均得点を尺度得点とし、この尺度得点を従属変数としたt検定を行う。

(※以下は2点)

- ・ボンフェローニ (Bonferroni) の補正を行う。通常の有意水準を項目数で割った値を、一つの検定の有意水準に設定する ($.05/10=0.05$)。

出題の意図

[2]

パーソナリティに関する主要な理論の内容と具体例を問うことで、基礎的な心理学の知識の有無を確認することを意図した。

[3]

心理学で用いられる統計法の誤った使用例に対する知識を問うことで、統計に関する適切な知識の有無を確認することを意図した。

1 次の用語について、その内容を簡潔に説明しなさい。4 問全てに解答しなさい。

(1) outreach (5 点)

臨床心理学におけるアウトリーチ (outreach) とは、①支援が必要であるにもかかわらず②自発的に支援を求めない、あるいは求められない人々に対して、③④支援者側から積極的に働きかけることを指す。⑤代表的なものとしては、災害時の支援や引きこもり支援が挙げられる。

(2) POMS2 (5 点)

Profile of Mood States 2nd Edition の略で、①気分の状態を評価する質問紙である。成人用：18 歳以上と青少年用：13～17 歳の 2 種類がある。「今日を含めて過去 1 週間」、「今現在」といった②所定の時間枠における気分状態を評価し、③④【怒り～敵意】【混乱～当惑】【抑うつ～落込み】【疲労～無気力】【緊張～不安】【活気～活力】【友好】の 7 尺度と、⑤ネガティブな気分状態を総合的に表す「TMD 得点」から評価できる。

(3) ピアジェの認知発達理論

ピアジェの認知発達理論とは、スイスの心理学者ジャン・ピアジェが提唱した、①子どもが知識や理解を段階的に獲得していく過程を説明する理論である。認知発達には、②③感覚運動期、前操作期、具体的操作期、形式的操作期の 4 つの段階があり、各段階で特徴的な思考様式が現れる。④たとえば、前操作期には自己中心性が、具体的操作期には保存概念の獲得が見られる。子どもは各段階でスキーマ (スキーマ) の⑤同化・調節・均衡化を繰り返し、能動的に認知構造を再編成しながら発達していくと考えられている。

④についてそのほかの例

感覚運動期 : 循環反応、対象の永続性の確立

前操作期 : 自己中心性

具体的操作期 : 脱中心的な思考、保存の概念の獲得

形式的操作期 : 抽象的な思考、一般論の理解、仮定の理解、未経験の想像 など

(4) obsessive compulsive disorder

①②自分の意思に反してある考えが頭に浮かんでくる強迫観念と、③④その強迫観念によって生じる不安を振り払おうと、何度も同じ行動を繰り返してしまう強迫行為からなる⑤精神疾患。

【出題の意図】

用語の理解度は受験生の基礎的な学習到達度を反映している。本学の専門性にに基づき、基本的な臨床心理学の用語、また現代的な心理学の用語の理解度を把握することが出題の意図である。

2 発達検査と知能検査の具体例を挙げながらそれぞれを説明し、違いを述べなさい。特に、算出される結果の異同について触れること。

発達検査は、主に乳幼児の子どもを対象に、発達の到達度や偏りを把握することを目的とする検査である。例えば、新版 K 式発達検査、津守・稲毛式乳幼児精神発達検査、遠城寺式乳幼児分析的発達検査が挙げられる。新版 K 式発達検査では、姿勢・運動、認知・適応、言語・社会といった領域ごとの発達水準を測定し、発達年齢や発達指数 (DQ) が算出される。これにより、全体的な発達の遅れや領域間のアンバランスを評価できる。

一方、知能検査は、主に学齢期以降を対象に、知的能力の水準や構造を測定する検査である。例えば、ウェクスラー式知能検査 (WPPSI、WISC、WAIS)、KABC-II が挙げられる。そのうち WISC-5 では、言語理解、視空間、流動性推理、ワーキングメモリ、処理速度といった複数の下位指標から全検査 IQ (IQ) が算出される。知能検査では、同年齢集団との比較に基づく標準得点が重視される。

両者の違いとして、発達検査は発達の進み具合を子ども個人の生活年齢と比較して捉えるのに対し、知能検査は同年齢集団内で標準化された得点を用いて相対的位置づけを示す点が挙げられる。また、算出される結果も、発達検査では発達年齢や DQ、知能検査では IQ や指数得点が用いられる点で異なっている。

発達検査の説明と具体例 5 点

知能検査の説明と具体例 5 点

算出される結果の違いに触れながら違いを説明している 5 点

【出題の意図】

心理職に求められる役割の一つとしての、支援対象者となる者のアセスメント (心理状態の観察とその結果の分析) に関する出題である。特に教育や福祉など子どもに対する臨床領域でニーズの高いフォーマルアセスメントであるにも関わらず、混同されることの多い知能検査および発達検査について、その基本的な内容や違いを回答させることを意図した。

3 初回面接において家族歴を聴取する理由を述べなさい。

初回面接において家族歴を聴取する理由は、それが①クライアントの心理的問題を理解するための基礎情報となるからである。

家族歴には、②家族構成（それぞれの年齢）や職業、家族の既往歴などが含まれる。客観的情報だけでなく、クライアントが家族メンバーに対してどのような感情を頂いているのかについて質問することで、③家族関係の特徴を把握することができる。家族歴はクライアントの生育歴とも密接に関連しており、家族の歴史を聞くことがクライアントの歴史、クライアントの現在の人物像を理解するための背景因子と位置付けることができる。そのうえで、家族関係におけるリスク要因と保護要因の双方を評価するためにも重要となる。

【出題の意図】

臨床心理学概論や臨床心理面接を学ぶ過程で、受験生には心理アセスメントについても学習していることを期待している。基本的な情報の一つに家族歴があり、それを聴取することで何がアセスメントされるのかを理解しているのかを問う問題である。